

2009年10月5日

第2回

GNH シンポジウム

(財)庭野平和財団



明治学院大学教授 辻 信一 氏
基調講演

パネリスト

富吉 正一郎 氏

水俣市役所農林水産振興室



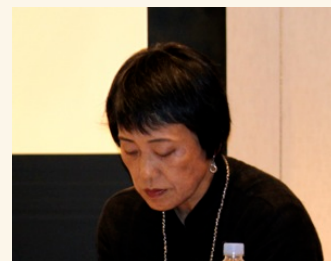
奥谷 京子 氏

WWB/ジャパン (女性のための
世界銀行日本支部) 代表



榎ひさ恵 氏

特定非営利活動法人「明るい社
会づくり運動」 副理事長



庭野平和財団の第2回「GNH (国民総幸福量) シンポジウム」が10月5日、佼成図書館視聴覚ホールで開催され、60人が参加した。今回のテーマは『日本におけるGNHのかたち』。当日は、明治学院大学国際学部の新谷一教授が基調発題に立った。続くディスカッションでは、パネリストとして水俣市役所農林水産振興室の富吉正一郎氏、WWB/ジャパン (女性のための世界銀行日

本支部) の奥谷京子代表、特定非営利活動法人「明るい社会づくり運動」の榎ひさ恵副理事長が登壇。関西大学社会学部の草郷孝好教授がコーディネーターを務めた。基調発題や各氏の発言要旨を紹介する。

コーディネーター
草郷孝好・関西大学教授



基調講演 文明の危機－社会にとっての幸せとは何か

明治学院大学教授 辻 信一氏

エネルギー危機、食料危機、環境危機、金融危機、経済危機と、現在は「危機」のオンパレードです。私はこれらの根っこに「文明の危機」があると考えています。

文明とは、特定の文化に根づいた「豊かさ」を肥大化させる衝動を持っています。これまでに現れた文明はすべて滅んでいきましたが、その理由を簡単に言ってしまえば、豊かさに折り合いがつかなくなってしまったからだと思います。

産業革命以後の近代、現代文明の特徴は「経済成長」です。それを拡大する衝動がシステム化され、今や共通の常識にさえなっています。また、多くの経済学者や専門家が携わり、豊かさは数量化できるという観点に立ちます。有名なものがG N P（国民総生産）やG D P（国内総生産）であり、これらの数字が、わずかでも上がる、または下がると大ニュースになります。

また、近代、現代文明を支えてきたものは化石燃料であり、石炭や石油をエネルギーとすることで未曾有の物質的豊かさを享受しました。しかし、こうした豊かさは“幻想”のようなものだとは私は考えています。

巨大なビルは、世界中の資源によってつくられるだけでなく、膨大なエネルギーを供給し続けるこ



とで機能します。他の国の人々、さらに未来の世代に属する資源までも消費しており、それによって、未来はどうなっていくのでしょうか。

加えて、これまでは石油が永遠に産出されることを前提に、建造物から法体系、社会システム的一切切切をつくってきました。この前提が崩れてしまえば、どうなるのか。豊かさの幻想とはそういう意味です。

もう一つの幻想。それは豊かさの中に幸せが含まれるという考え方です。

「幸せは、お金ではない」という感覚が、かつて常識としてありました。2000年から2500年前、宗教の偉大な開祖たちが

言ったことは、まさにそのことではないでしょうか。つまり、「豊かさを幸せと取り違えてはいけない」「豊かさは幸せへの道どころか、幸せを破壊してしまうのだ」ということです。

1968年に暗殺されたアメリカの政治家・ロバート・ケネディが次のような演説を残しています。

「長い間、私たちは人格や共同体の重要さよりも、物質的な富を蓄積することをはるかに優先させてきた。今や8千億ドルを超えたアメリカのG N Pだが、その中には空気汚染やタバコの広告や、ハイウェイでの多数の事故死者を運ぶ救急車が含まれている。家を守るための特殊な鍵、それを破って侵

入する犯罪者たちを収容するための牢屋（ろうや）もGNPのうちだ。巨木の立ち並ぶレッドウッド原生林の破壊、美しい自然を呑み込んでゆく都市化の波も、GNPを押しあげる。戦争で使われるナパーム弾も、核弾頭も、街頭のデモ隊を蹴（け）散らす警察の装甲車も。ウィットマン社製のライフルもスペック社製のナイフも、子どもたちにおもちゃを売るために暴力を礼賛するテレビ番組も」。

次に、彼はGNPに含まれないものを挙げています。「GNPの中には、子どもたちの健康、教育の質、遊びの楽しさも含まれていない。詩の美しさも、夫婦の絆（きずな）の強さも、政治における知的な議論も、役人たちの誠実さも勘定されない。私たちの機知も勇気も、知識も、学びも。私たち一人ひとりの慈悲深さも、国への献身的な態度も」。

そして、こう結びます。「要するにこういうことだ。国の富を測るはずのGNPからは、私たちの生きがいのすべてがすっぽり抜け落ちている」と。つまり、GNPからは幸せが抜け落ちているというわけです。

それから数年後、ヒマラヤのブータンの国王がGNHを提唱し、国内で研究が進められました。90年代に世界に紹介され、多くの人を驚かせました。

GNHは「自然環境の豊かさ」「伝統文化の保全と促進」「よい政治」「公正な経済発展」という4項目からなっています。一部の人が富を手にし、多くの人々が飢えているのは経済発展ではないという考えです。

現在、世界各地でGNHに関する国際会議や研究が行われるようになりました。「幸せとは何か」。そう問い直していくことが、今、一人ひとりに求められているように思います。

「村丸ごと生活博物館」で地域を愛し、元気創出

◆パネリスト 水俣市役所農林水産振興室 富吉正一郎氏



水俣市では経済の振興だけでなく、住民の元気づくりのために「元気な村づくり条例」を定め、地域の村を「村丸ごと生活博物館」に指定して取り組みを進めています。これは、田んぼや畑、暮らしの知恵など村のすべてを展示物に見立て、住民が訪問者に生活風景を提供するものです。

博物館には、村を案内する「生活学芸員」と生活技術を提供する「生活職人」がいます。村の誰でもその肩書を持つ資格がありますが、一つだけ大きな条件があります。それは「あなたの住んでいるところに何があるの」と聞かれた時に、「何もない」と言わないことです。村の人は自分の住んでいるところを実はよく知りません。“ある”ことが当たり前となっていて気づかないからです。

そのため、よその人と一緒に村を歩いて写真を撮ったり、みんなで地図を作ったりして“あるもの探し”をします。実際に地図を作ること、当たり前にあるものは当たり前じゃないという目を持ってもらうことができます。住んでいる地域を知ると好きになり、好きになると大事にしようという気持ちが生まれます。

現在、水俣市では四つの地区を生活博物館に指定しています。どこも水俣川の源流の地域で高齢化や過疎化が進んでいます。その一つの大川地区を訪れた女子高生たちは、「おじいちゃんやおばあちゃんと話すのが楽しかった」「こんなところに住んでみたい」と喜んでいました。海外から人が来るようにもなりました。

取り組みを通じ、「自分では気づかなかった村の良さを外の人が教えてくれた」と、住民が元気になってきました。また、訪問者がいるからと自主的にゴミを拾い、地元の食材でもてなそうと再び野菜をつくるようになりました。「村丸ごと生活博物館」は、こうした自主的に行動を起こす理由をつくることに大きな意味があると思います。

人の役に立つ喜び味わい「共に生きる社会」実現へ

◆パネリスト 特定非営利活動法人「明るい社会づくり運動」の槇ひさ恵副理事長

日本のボランティアや市民活動が始まった当初は、「強い者が弱い者を助ける」といった発想があったように感じます。それが30年、40年と経るうちに、全体として地球上のさまざまないのちと「共に生きる」という価値観に収斂（しゅうれん）されてきたと受け止めています。

現在、日本では年間の自殺者が3万人を超え、大きな問題になっています。私が毎年訪れるモンゴルは日本と比べて経済規模は非常に小さく、公務員の月収は数十ドル、遊牧民に至っては現金収入がほとんどない生活です。しかし、夏休みを2カ月ほど取り保養に行く、あるいは田舎で家族や親戚と過ごすといった暮らしをしています。自殺者も多くありません。

日本は反対に収入はあるけれど、時間のゆとりがない。この仕事を終えないと職を失うかもしれないという危機感を持ち、競争社会を必死に生き抜いていかなければならない状況です。そんな中で、市民活動を経験すると、多くの人が自分の生きる上での軸が競争社会の原理だけに乗ってしまうことに不安を感じます。本当の「幸せ」について考えるのでしょうか。収入は多くなくても食べるものに困らず生活が成り立ち、それでいて多くの人にとって生きやすい社会をつくっていききたいと、時間やエネルギーを使える人は元気です。

日常で向き合っている問題や、人々の痛みをどう受け止めて共に生きていくか。「明るい社会づくり運動」は、自分たちのできるところから地域社会に貢献していこうと、全国各地で取り組んできました。普段の生活でお互いに感謝の気持ちや生かされている有り難さを感じ、誰かの役に立つことを大切にしています。

募金活動も困っている人が助かると思えば一生懸命訴えることができます。人のために頑張ると元気が出る。そうした人の役に立つことで得られる喜びを感じられるのが地域運動だと考えています。

農家のおばあちゃんたちの生き生き笑顔を応援！

◆パネリスト WWB/ジャパン（女性のための世界銀行日本支部）奥谷京子代表



日本の食料自給率は40%といわれています。インターンシップ（就業体験）でWWB/ジャパンに来た学生がこの数字の根拠を知りたいと、農林水産省に問い合わせました。

食料自給率は、農家のJA（全国農業協同組合連合会）への野菜の出荷高で計算されます。つまり、自分たちが食べるためにつくった野菜のほか、曲がったきゅうりや少し傷ついたナシといった規格外の生産物など、市場に出回らないものは含まれません。

実際に聞いた話では、ブロッコリーの規格は六角形か八角形だけだそうです。そのような規格外のものが年間30万トンも捨てられています。

一方、外食産業などで廃棄される食料も消費量に含まれており、自給率に影響します。

そうした中で、実際に何ができるかを考えました。まずは生産者の笑顔をたくさんつくることではないかと思い、現在、農家のおばあちゃん的笑顔を撮るプロジェクトを

させて頂いています。おばあちゃんたちがつくられた出荷できない規格外の野菜などを私たちが買い取り、東京の人々に売ることによって笑顔を増やす応援をしています。

売り上げはすべて皆さんに現金でお渡ししています。すると、金額の差を明確に把握でき、それが「頑張ろう」という気持ちを起こさせ、新しい品種をつくって良いものを売ろうという意欲につながるようです。

実際、一度リタイアした92歳のおばあちゃんが再び畑に戻ってくるという現象が起きました。また、「病院に通わなくても、畑が病院じゃ」とおっしゃる人もいます。

元気に生き生きと過ごすおばあちゃんの笑顔を増やす。私たちは指標に表れない部分を大切に活動を行っています。



◆質疑応答から

パネルディスカッションでは、会場から「地域に根ざした豊かさを追求している日本の事例」についての質問が出された。

辻氏は、東北や北陸地方で豊かさについて尋ねた経験を踏まえ、「日本はGNHが高い」と考えている人は少ないものの、自分が暮らす県に対しては「高い」と感じている人が多いことを紹介。その要因として「食べ物」「自然環境」「伝統的な祭り」などが大きく影響していることを挙げた。また、富吉氏は「村丸ごと生活博物館」が実施されている村では、食べる、飲む、人と話す、仕事を楽しむといった「生活文化」を大事にしていると報告し、「包丁を20本持っているより、20通りの切り方をできる方が文化的に豊かではないか」と語った。一方、槇氏は「自分が暮らす場所が宇宙の中心と思えることが何よりの幸せ」と指摘。異なる文化や人との出会いによって自らを再発見するとともに、多様性に気づく大切さを強調した。

このほか、「過疎化が進む中で活性化」に悩む地方の市長からアドバイスを求める声が上がった。これに対し、辻氏は都会のシステムに限界を感じ、「田舎」に熱い視線を送る学生や若者が増えている現状を力説。奥谷氏は地方での雇用を生む取り組みに触れ、農業などを中心とした起業支援を紹介した。

最後に草郷氏が総括。人のつながりや生き方を見つめ、「一人ひとりが自分のGNHを高めるために小さな行動を起こしてほしい」と呼びかけた。

